

聖書のなかの 天使たち

文・メアリー・ジョスリン
絵・エレナ・サンボリン
訳・女子バプテイスム







神さまのみ使い

わたしを守ってくださる天使
神さまの愛をとりついでくださるかた
まようも、あずる、いつまでも、わたしのそばにいて
願わし、守り、あまがわいてください。

詩44:1-2

もくじ

天使のコーラス 8

楽園の天使 10

天にとどく階段 16

天使にかこまれて 20

炎のなかの天使 22

守護の天使 26

マリアを訪れた天使ガブリエル 28

丘の上の天使たち 30

夜を見守る天使たち 36

復活の朝の天使 38

天使と竜の戦い 42

聖なる天使たち 44

まとめ 46

天使のコーラス

どこまでも すみきった
朝の空に
小鳥のさえずりが聞こえる……
いえ、あれは、
天使が奏でる楽音の音。

わたしの声も、こんなにきれいに響く。
天使がいっしょに飛んでくれているのかしら。
それなら、わたしも
このときとおった若い空を
どこまでも高く飛んでいこう。

おはなれいの子



どんなに、音がずうっと、どこまでもつづいていても
どんなに、空の青さにすいこまれそうになっても
わたしはこわくない。
くもりのないこの空にも、海にも、どこにでも
大きな大きな愛で
あなたも、わたしも、つづんでくたさる
神さまがいっしょに飛ぶのだから。



楽園の天使

昔、昔昔がはじまったばかりのころ、神さまは、それはそれは美しい園をおつくりになりました。エデンの園といいます。園の真ん中には、お日さまの光をうけて、きらきらとかがやく川が流れて、岸には、あじさいの水芭蕉、色とりどりの花がさいて、動物たちがあちこちまわっています。緑豊かな園にさそわれて、果物の木から、ひらひらと花びらが舞い落ちます。あ、この、あまい、いいにおり……。あんず、りんご、ぶどう、もも、さくらんぼ……。おいしい果物をいっぱい。

この園で、最初の男の人アダムと、女の人エバが、神さまのお声で、おひりから目ざめました。

「なあ、アダム、エバ、来てごらん。」

神さまのお声は、あたたかく、陽気なそよ風のように、ふんわりと届かってきました。

「わたしは、あなたたちがまろこぶように、この園をじゅんげした。ごらん、ぜんぶ、あなたたちのものだ。ただ、あの、むこうの、いっばんの木だけはちがう。あの果を食べてはいけない。あめには、この世のいのちのをせんぶだめにしてしまう、おそろしい毒があるのだ。けって食べてはいけないよ。」

アダムとエバは、その水にわかきさびさびとこは悪いとてんでした。神さまからいただいたものは例もからずばらしく、たりないものは例ひとつなかったからです。





ある日、エバがひとりですわっていると、道に散った木の葉がゆきこそと音をたてて、何か、近づいてくるようです。見ると、それは、見たこともない、へびのような生きものでした。その目は宝石のような、みしぎな光をはなっています。

「神さまは、きみに、何か、してはくれないとおっしゃったかい？」と、その生きものが小さな声でたずねます。エバは答えました。

「わたしたち、何をしてもいいのよ。ただ一つだけ、神さまは、あの、園の真ん中に立っている木にだけは、気をつけなさいとおっしゃったわ。もし、その実を食べたら、わたしたちだけでなく、世帯にゅうが、その場で死んでしまうって。」

すると、その生きものは、びっくりしたように、大声をあげました。

「えっ！ ほんとに、神さまがそんなことをおっしゃったの？ おどろいた！ きみたちは死んだりしないよ。ただ、世帯にはよいことだけでなく、わるいこともあると、わかるだけだよ。あれを食べると、神さまと同じくらいいさこくなるから、神さまはそれがいいのだったのかも。」

エバは考えました。

「神さまと同じくらいいさこくなる？……ずてきね。」

生きものはいいました。「そりゃ、今すぐ、食べてごらんよ。さあ、その実をあの石臼にも分けておやり。」

エバは手をのびして、金色の実をもぎとり、一口かじってみました。

「おいしいわ、アダム、あなたもこっちにきて、これを食べてみて！」

アダムもそれを食べました。……ほんまに、二人は、園がくらくらするような気がしました。「なんだか世界がらちがって見える、今までと。」

エバはふるえながら、小さな声でいいました。

「アダム、わたしたち、はたかよ、今までもっとも気がつかなかったけど。」

「おいで、はくたち、自分で服をつくらう。それからどこへ隠れよう。神さまがはくたちのしたことに気づかれるまえに。」



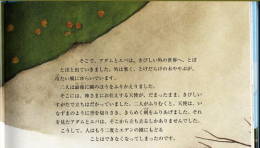


その夜、神さまは園を散歩をやりながら、

二人のしたことをおわかりになりました。

そして、とても悲しい、こおりつきやうな声でおっしゃいました。

「おまえたちは、なんということをしたのだ。あのかわいい実を食べてしまったからには、もうこの園にとどまることはできない。園と壁がはげしくあらそいあう外の世界へ出ていけなさい。そこでおまえたちは、苦しみながら生きることになる。」



そこで、アダムとエバは、さびしい外の世界へ、とぼとぼと出ていきました。外は寒く、こげだらけのおやもやが、冷たい風に吹かれています。

二人は園壁に頭をぶつけてしまいました。

そこには、神さまにお仕えする天使が、だまっていたまま、さびしいすがたで立ちまわっていました。二人がふりむくと、天使は、かならずまのよりに顔を振りまわ、さらめく翼をふりあげました。それを見たアダムとエバは、そこから立ち去るしかありませんでした。

こうして、人はもう二度とエデンの園にもどる

ことはできなくなってしまったのです。

